

Women

現代の吟子たちに聞く

荻野吟子は多くの困難を乗り越え、日本で最初の公認女性医師になった人物です。埼玉県では、荻野吟子の不屈の精神を今に伝える先駆的な活動などを通じて、男女共同参画の推進に顕著な功績のあった個人や団体等に「埼玉県荻野吟子賞」を贈っています。
※令和3年度「さいたま輝き荻野吟子賞」から名称変更

同賞を受賞された方へのインタビューを通し自分らしく生きるためのヒントや様々な苦労や壁にぶつかる中でどのように乗り越えたか等を紹介しています。



第2回（平成18年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

宇津木 妙子

UTSUGI TAEKO (スポーツ指導者)

ソフトボール指導者の草分けとして30年
努力は裏切らない



私の父は面倒見がよくて、部下のために給料を使うような人でした。母も葬式でまんじゅうをもらって「うちだけでおいしいものを食べることはない」と4つあるまんじゅうの3つを近所に配る人。そんな父と母の影響で私は人の面倒を見るのが大好きな人間に育ちました。宇津木麗華を始め、中国のソフトボール選手を3人引き取り育てて来ましたし、教え子たちは私の子供、教え子たちの子供は私の孫です。

30年前、私が初めて日立(現ルネサス)高崎の女子ソフトボール部監督になった頃は、女に監督がやれるかと言われました。悔しかったですね。認めさせるには勝つしかない。挨拶、他者への気配り、整理整頓と生活ルールを作り、徹底した練習で、当時3部だったチームを4年で1部に昇格させました。

うつぎ たえこ 1953年川島町生まれ。中学1年からソフトボールを始め、星野女子高校を経て、ユニチカ垂井で内野手として活躍。2000年シドニー五輪で女性初のソフトボール女子日本代表チーム監督に就任、銀メダルを獲得。04年アテネ五輪監督、銅メダルを獲得。10年、東京国際大学女子ソフトボール部の総監督に就任。現在に至る。（取材2014年）

今、ソフトボール界は半数が女性監督です。教え子の中にはシングルマザーの監督もいます。私は「試合と子供の運動会が重なったとき、運動会を優先できる監督になりなさい」と彼女に言います。選手やコーチと揺るぎない信頼関係を築いてこそ、できることだからです。

指導者は欠点も含めて選手一人一人の個性を知り、この子にはこのやり方と、引き出しをたくさん作って指導をすることが大切です。代打で打席に立つ選手が緊張していれば、「ヒットを打たなくてもいい。つなげればいい。おまえならできる」と言葉をかけ、肩をポンとたたいてやる。選手はリラックスして本来持つ力を発揮します。

たくさんの選手を育ててきたように、私も教え子たちに学び、育てられてきました。今も子供たちから毎日パワーをもらっています。私ほどの幸せ者はいないと思いますね。

朝起きてまずすること

布団の中で5分間のストレッチ

好きな食べ物

そうめん（冬はにゅうめん）

愛読書

推理小説。内田康夫、赤川次郎など

リラックス・タイム

お風呂。サウナが好き。地方に行くと必ず温泉かスーパー銭湯に行きます

尊敬する人

父親。自分より周囲のことをまず考え、人の面倒を一生懸命見た人

5年後の私

今のままで走り続けていたい



愛用のサンバイザーとサングラス。宇津木さんのトレードマークになっている。

第4回（平成20年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

山田 香織

YAMADA KAORI (盆栽家)

男社会の盆栽界に新しい息吹を吹き込む伝道師 暮らしに一鉢の癒しを



高校の頃までは盆栽園という家業が重くて、古臭くて、嫌いでした。家業を避けるように大学ではマーケティングを学び、SE（システムエンジニア）の職にも内定しましたが、悩んだ末に家業を継ぐ決心をしました。老舗の盆栽園の中にベンチャーを作ろうと思ったからです。

盆栽業界で女性の盆栽家は1%未満。女性が仕事をする事自体が異端です。敷居もプライドももの凄く高い。大学でマーケティングを学んで、盆栽業界を見つめ直したとき、提案が足りない業界だとわかったんです。どんなに有名な企業でも製品を売り出すために、予算を立て、人を費やし、言葉を選んで、伝える努力をしている。それに比べて殿様商売だと思いました。私は女性でそれだけで門前払いなら、これまでの客層とは異なる女性や若い世代に新しい盆栽の魅力を伝えていきたい。それが21才のときに始めた「彩花(さいか)盆栽」です。

やまだ かおり 1978年さいたま市生まれ。盆栽清香園4代目園主山田登美男氏の一人娘として生まれ、幼い頃より跡取りとして盆栽の教育を受ける。99年に彩花盆栽教室を設立。NHK「趣味の園芸」のキャスターを始め、講演や執筆活動など多方面で活躍。（取材2013年）

伝統的な盆栽はひとつの鉢に1本の木で自然を表現するのがルールです。それに対して彩花盆栽では、枝の配置、剪定(せんてい)など、盆栽の基本は守りながらも、1本の木にこだわらず、樹木と草花を寄せ植えにして、小さな風景を楽しみます。教室の参加者は9割が女性ですが、マンション住まいの方に「小さなお庭ができたみたい」と喜んでいただけると嬉しいですね。1人でも多くの方に盆栽の癒しパワーを感じていただきたいです。

家では6才と1才の息子の母です。保育園児は洗濯物が多いので、乾燥機がフル稼働しています。完璧主義は捨て、できることをしようと思っています。最近、長男が「僕もママと一緒に働きたい」と言ってくれるんですよ。雨が降れば「盆栽、喜んでいるね」って。子供の何気ないひと言が今の私にはすごく励みになっているので、これからも働く母の背中をたくさん見せていきたいと思っています。

朝起きてまずすること

濃い目の緑茶を ゆっくり飲む

好きな食べ物

お寿司(白身)、納豆

愛読書

北方謙三著『三国志』（角川春樹事務所刊）
死と隣り合わせでいながら、死の直前まで夢しか見ていない登場人物たちに憧れます。

リラックス・タイム

1日の終わり。自分に帰れる時間

尊敬する人

仕事と子育てを両立しているすべての女性

5年後の私

和の文化のナビゲーターとして活躍していきたい



山田さんの彩花盆栽の作品。
「杉と松（ひのき）」を配し、
クリスマスイメージしてみました

第5回（平成21年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

白石 光江

SHIROISHI MITSUE（養豚経営者）

家族で経営協定を作り、「幻の豚」の産直にチャレンジ
ベストワンよりオンリーワン



「なぜ養豚を？」とよく聞かれます。夫は高校教師、同居する夫の両親は養蚕（ようさん）を中心とする兼営農家で、私は家事や子育ての合間に農業の手伝いもしていました。家にいながら収入を得られる仕事をしたいと考え、母豚を3頭飼っていたことがきっかけで養豚を始めました。

「昔の豚肉は美味しかったね」とご年配の方から聞くことがあります。脂身が口の中でとろける感触。今の豚肉とは素材が違うことがわかったのです。夫と相談し、昭和30年代まで多く飼われていた絶滅寸前の「中ヨークシャー種」を譲り受け、育てることにしました。

一般に飼われている大型種は、出荷まで6か月ですが、ヨークシャー種が50%の古代豚は7～8か月かかります。「大型種なら楽なのに…」と思ったことは何度もあります。

しろいし みつえ 1946年群馬県藤岡市生まれ。美里町の兼営農家の長男と結婚。32才のときに養豚を始め、2年後、幻の豚「中ヨークシャー種」を基礎豚とする経営に切り替える。96年より産直販売を開始。長男夫婦と協力し、生産・加工・出荷のシステムを家族で作る上げる。埼玉県農村女性アドバイザー、美里町教育委員、埼玉ひびきの農協理事などを歴任。（取材2013年）

でも、より美味しく、安全な豚肉を生産したい夢と、中ヨークシャー種の「種の保存」という使命感で取り組んでいました。

勤めの傍ら経営を手伝っていた夫と、98年に「家族経営協定」を締結しました。家族経営協定とは農林水産省が奨励している協定で、経営の方針や役割、就業条件等について家族みんなで話し合い、協定書を作ります。農家では女性が無給で働くことも多いものですが、「協定」を締結してからは張りあいを持って仕事ができるようになりました。その後、長男夫婦も手伝うようになり、夫と私、長男夫婦の4人で「協定」を結び、それぞれを大切なパートナーと位置づけて仕事をしています。

現在は母豚50頭、雄7頭、年間出荷頭数約850頭。養豚家としては非常に小規模ですが、古代豚でしか味わえないおいしさを消費者の皆さんに届け、家族みんなで協力しながら生産、加工、販売に取り組んでいます。

朝起きてまずすること

洗濯機を回す

好きな食べ物

きんぴらごぼう（隠し味に牛乳を入れます）

愛読書

農業や畜産の専門書

リラックス・タイム

一人で空想する時間

（もっと自由時間が多くなったらとか…）

尊敬する人

野口英世

（障害を乗り越えて、黄熱病の研究に賭けた不屈の精神）

5年後の私

今と変わらず豚の世話をしていると思います。時間の余裕ができたなら英会話を習いたい



産地直送経営に伴い「幻の肉古代豚」の商標登録も行った。長男夫婦が手掛けの加工品もインターネット販売などを通じて好評だ。

第8回（平成24年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

故 田部井 淳子

TABEI JUNKO（登山家）

東北の復興を担う若い世代を富士登山で応援したい

大切なのは小さなこの一歩



3年ほど前にNHKの番組で内多勝康アナウンサーと2人で北アルプスを縦走したことがありました。富山県の立山から入り、薬師岳、槍ヶ岳を越えて、穂高連峰のジャンダルムまでの60キロを23日かけて歩きました。ジャンダルムに立つと、歩いてきた山並みはるか向こうに見渡せます。内多アナウンサーは、私たちの一歩はただか40～50cmに過ぎないけれど、一歩一歩積み重ねて来た結果、ジャンダルムに立っているんですねと、とても感激されていました。

東日本大震災後、被災した高校生を富士登山に招待するプロジェクトを行っています。家族と離れ他県に移らざるを得なかった生徒、1年の時と2・3年は別の高校に進まざるを得なかった生徒など、多感な時期に受けたさまざまな心の傷が、寄せられた生徒たちのアンケートからうかがい知れました。

たべい じゅんこ 1939年福島県三春町生まれ。62年、昭和女子大学卒業。69年、「女子だけで海外遠征を」を合言葉に女子登攀（とうはん）倶楽部を設立。75年、エベレストに女性として世界初の登頂に成功。92年、女性で初の七大陸最高峰登頂者となる。年数回の海外登山など多忙な中、故郷・福島の被災者支援に力を注いでいる。（取材2013年）

第1回目は61人の東北の高校生が集まり、地元・富士吉田市の高校生も加わって山頂をめざしました。お父さんの遺品の携帯電話に励まされて歩いた子、見知らぬ目の前の生徒が差し出した手につかまって重い足を踏み出した子…。全員が頂上まで登ることができ、生き生きとした顔で帰ってきました。この体験が東北の復興の力になってくれると信じ、これからもプロジェクトを続けていきたいと思っています。

私は七大陸最高峰に登ったあと、世界各国の最高峰への登頂を続けています。現在までに登ったのは66か国。今年はニカラグアの最高峰に登り、ヨルダン、クロアチア、東ティモールの最高峰を予定しています。1年のうち約150日を山で過ごすのは幸せなことです。

限られた時間の中で私たちが残せるものは、毎日の生活の積み重ね、自分自身の歴史です。いずれ死んでいくとき、楽しかった、やるだけやった、生まれてきてよかったと思いたい。もっともっと密度濃く生きて、自分自身の歴史を豊かなものにしたいと思っています。

◆田部井さんは2016年10月永眠されました。

朝起きてまずすること

毎朝違うが、緑茶、紅茶、ミルクティなど温かいものを飲む

好きな食べ物

くだもの、水なす

好きな映画

サスペンス映画が好き『ペリカン文書』はハラハラ、ドキドキした一作

リラックス・タイム

TV映画をみるとき

5年後の私

各国の最高峰に登っていたい



ブータンの弁当箱「ポンチュウ」。愛用している竹製の入れ物です。おやつを入れて山に持っていきます。

第8回（平成24年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

碓井 美由紀

USUI MIYUKI (エンジニア)

宇宙が大好きな少女が選んだイオンエンジン開発への道
夢は億千万キロの彼方へ



私が生まれた小川町には「少年自然の家(現・小川げんきプラザ)」があって、小学校3年のとき、父に連れられて初めてプラネタリウムを見ました。星の美しさに感動し、喜々として家に帰ったのが宇宙との出会いです。5年生のとき、向井千秋さんの活躍をテレビで見て、「私も宇宙で何かしてみたい」と夢が膨らみました。

小さいころは、男の子にからかわれることがあって、よく涙を浮かべていました。その度に母から「男に負けるな」と励まされ、「腕力はなくても女には知恵がある」と勇気をもらいました。負けず嫌いで逆境をも糧にしちゃう私の性格は、母の影響かもしれません。

父は母のそんな言葉を横で聞いて、「そうだよね」という人でした。父もエンジニアですが、ハンダゴテの使い方を教えてくれたり、ラジコンを作ったり、自分も楽しみたいから一緒に楽しもうという考えで、友だちのように接してくれました。私が宇宙工学の道に進めたのは、ものづくりの楽しさを教えてくれた父のおかげです。

猛勉強の末に大学院に入り、私はイオンエンジンに出会います。イオンエンジンは小惑星探査機

うすい みゆき 1984年小川町生まれ。2002年、川越女子高校卒業。06年、早稲田大学理工学部機械工学科卒業。08年、東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻修士課程修了。在学中、國中研究室に所属し小惑星探査機「はやぶさ」に搭載されたイオンエンジンを研究。現在、NECにて「はやぶさ2」イオンエンジンシステムを開発中。

(取材2013年)

「はやぶさ」に搭載された効率の良さと低燃費を誇るエンジンです。大学院の恩師・國中 均先生とその後輩で私の職場の前任者・堀内康男さんが作ったものです。國中先生に「これからは衛星にイオンエンジンがたくさん搭載される時代が来る、一緒に作っていかないか」と言われ、「それはすごい! 自分で作ったものがたくさん宇宙に行く時代が来るなんて…」とこの世界に飛び込みました。

現在、JAXA(宇宙航空研究開発機構)が2014年度に打ち上げ予定の「はやぶさ2」に搭載するイオンエンジンの開発に携わっています。社内ではその取りまとめ役としてさまざまな宇宙分野のスペシャリストと協力しながら仕事を進めています。ときに困難を極めますが、私にしかできない仕事という自負を持って取り組んでいます。

自分の夢を実現するには、「どうせ私なんか」と思わないことが大事だと思います。失敗したっていい。まずはやってみる。動いてみる。かく言う私もいろんな壁にぶつかり、「どうせ私なんか」とへこむことはしょっちゅうあります。でも、その度に「ここから切り拓くのが碓井美由紀だ」って、自己暗示をかけています。

朝起きてまずすること

鏡の前で笑顔の練習

好きな食べ物

袋屋(長瀬町)のすまんじゅう

好きな映画

「ライト・スタッフ」

音速の壁に挑戦し続けるチャック・イエーガーがカッコいい。

リラックス・タイム

帰宅後、夫と話す時間

尊敬する人

父親(一番の理解者であり目標)

5年後の私

子育てと仕事を両立していきたい。それが可能な職場環境にしていきたい



2010年に帰還した「はやぶさ」の模型。中央部に搭載されているのがイオンエンジン。前方は人と「はやぶさ」との大きさの対比。

第9回（平成25年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

平間 保 枝

HIRAMA YASUE（社会起業家）

バングラデシュの女性たちを支援して17年

手仕事で世界をつなぐ



サクラモヒラは、私がバングラデシュの女性たちと立ち上げたワークチームの名前です。「サクラ」は桜。「モヒラ」はバングラデシュの公用語・ベンガル語で「女性」。バングラデシュとの出会いは17年前、翻訳の仕事で知り合った駐日バングラデシュ大使ハク氏の誘いで現地を訪れたのがきっかけです。

ハク氏のゆかりの地ナラヤンプール村に着くと、待ち構えていた子どもたちから「ジンダバー、ヒラマ！（頑張れ、平間！）」の大合唱。呆気にとられる私にハク氏は「村は貧乏だ。見ての通り何もない。この村の支援を頼む」と言いました。彼は開発支援者を探していたのです。支援などしたことがないし、自信もない。でも、礼節ある村の女性たちに心惹かれるものがあり、年に1度村を訪れるうちに、自分にできることは何かを考えるようになりました。

手始めに、家もなく、夫もない27人の女性でサクラモヒラの会を組織し、貯金通帳を作ってもらいました。マイクロクレジット（貧困者を対象と

ひらま やすえ 1948年生まれ。翻訳、通訳の職を経て、2000年よりバングラデシュのプロジェクト「サクラモヒラ」を運営。現地の若い女性を組織し、伝統刺繍「ノクシカント」を取り入れた絹、綿の衣料品やバッグを生産し、女性の雇用を創出。製品を日本で販売し、収益を現地の発展に役立てるなど社会企業家として活躍している。（取材2014年）

した少額の融資）で、彼女たちにお金を貸して、野菜の種や山羊を買ってもらい、生活の基盤を作る支援をしました。2009年に、村の女性を対象とした手仕事の職業訓練を開始。仕事場を作り、ミシンを4台買い、ダツカに部屋を借りて寝食を共にしながら、手仕事の技術を向上させていきました。

出来上がった製品の値段について、最初は「ヒラマちゃん、決めて」と私への依存心が強かったのですが、「自分たちの製品は自分たちで値段を決めなきゃ」と言う、リーダー2人で取引価格を設定して私と対等に交渉するようになりました。「いいものを作る」という共通の目的が私たちの信頼関係を支えています。

現地の女性たちには工賃を保障しますが、サクラモヒラが潤沢に運営されているわけではありません。でも、ワークチームとして補足し合いながら前に進んでいく過程があってもいいかもしれません。国籍を超えて他者に思いを馳せながら、サクラモヒラの製品をプロデュースすること。その製品を通して世界に支援の輪を広げることが私の夢です。

朝起きてまずすること

白湯に生姜のスライスを入れて飲む

好きな食べ物

クロワッサン。毎日食べても飽きないくらい好き

好きな映画

「若草物語」

登場人物に品性があるから。長女のメグが特に好き

リラックス・タイム

自宅からオフィスまで30分かけて歩く時間

5年後の私

「サクラモヒラ」のワークチームが集う場所とショップを持っていたい



サクラモヒラの仲間たち。
10代の女性10人とリーダー
2人のワークチームです。

第10回（平成26年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

貫井 香 織

NUKUI KAORI（農業者）

お茶と原木しいたけの生産者からの「食」の発信
「食」を愉しむ幸せを届けたい



美味しいものを作りたい。そうは言っても、農業の世界に飛び込んだ当時、「家業」とはいえ、「原木しいたけ」と「お茶」の栽培の知識は皆無。まずは父の後ろについて学び、生き物である農産物の成長を見守る楽しさ、良いものができた時のうれしさを知りました。日本の四季のもたらす恩恵も改めて感じました。それが「生産者」としての自分の活力であり、原点となっています。

私にも迷いの時期がありました。大学卒業後就職した会社は、いずれも外部からクライアントの成長をサポートする仕事でした。次第に自分自身で事業を手掛けたいという気持ちが強くなり、ビジネスとして「農業」を選択することになりました。

もともと「食」に興味がありました。「食」には、「生きるための食」という原点と、その対極に「愉しむ食」があると思っています。「食を愉しむ」ことで幸せを感じられる人がいるなら、「食材の提供」という形で幸せが届けられないか考えたのです。

自分が作った物を、より多くの人の手元に届けるにはどうしたらいいか。そう考えた結果、レストランへの卸がスタートし、海外への販売もスタートしました。食べ方の提案を考えることが、加工品のバリエーションも生み出しました。

ただし、目指すのは「八百屋さん」、「プランナー」ではなく、あくまで「生産者」。そして「食べ

ぬくい かおり 1978年埼玉県生まれ。成蹊大学経済学部卒業。採用コンサルティング会社、PR会社を経て、2008年、29歳の時に就農。原木しいたけ・狭山茶の生産から販売まで携わる。「農業のこせがねネットワーク」にも参加。現在、「日本グローバルファーマー連絡協議会」会長、農林水産省「農業女子プロジェクト」メンバー。
(取材2015年)

る人の姿」が常に目の前にあります。

活動していく中で様々なご縁もできました。自分の興味のあること、好きなことに対してはおのずと道ができる。というか、待っていても拡がらない。やりたいことは口に出す。自分自身がきちんと発信することで、自然にいろいろな仕事に結びつく情報が舞い込んでくるようになりました。

今、農業をやっている中で、しがらみは感じません。農業に関わらず、また、年齢、性別に関わらず、どんな世界でも、やりたいことができるかできないかは、自分がやるかやらないかだと思います。

今関わっている「農業女子プロジェクト※」にしても、やりたいと思って手を挙げました。自分でもおもしろいと思える企画であれば、今後も参加していきたいと思っています。

せっかく生きているんだから、わくわくしていたい。その「わくわく」を実現すると、また違う景色が目の前に広がってきます。それを繰り返して追いかけている気がします。

※農業女子プロジェクト（農林水産省経営局就農・女性課）：女性農業者が日々の生活や仕事、自然との関わりの中で培った知恵をさまざまな企業のシーズ（種子）と結びつけ、新たな商品やサービス、情報を社会に広く発信していくためのプロジェクト。

朝起きてまずすること

まずは緑茶を淹れます

好きな食べ物

とうもろこし（しいたけももちろん好きです）

好きなTV

プロジェクトX、プロフェッショナル、情熱大陸
リラックス・タイム

ヨガ「今日のヨガをする時間を作った自分に感謝しましょう」インストラクターの言葉に共感

尊敬する人

特定な人ではないが、一生懸命な人

5年後の私

今やりたいことは通過して、違う景色を追いかけている



貫井さんのアイデアで生まれた加工品。しいたけカレー、きのここあ



第11回（平成27年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

小林 あゆみ

KOBAYASHI AYUMI（合同会社ままのえん代表）

女性の活躍の場を増やしたい

子育てしながら「自分育て」



自己実現の場 ままのえん

ままの*えんの「えん」には、いろいろな意味が込められています。人のつながりの「縁」、輪の「円」、支援の「援」、お金の「円」。そして、「ままのえん」には、非営利組織の「ままの*えん」と、事業を行っている合同会社「ままのえん」の2つの顔があります。

「ままの*えん」は子育て中のママたちの眠っているスキルを掘り出し、自分を知り、深め、そしてつながり、自分を育てる場です。誰もが気軽に来れるよう、部活動と呼ぶ様々な活動を行っています。そんな部員は300人。さらに一歩踏み出したいと望む人には、「合同会社ままのえん」で仕事を提供していきます。一口に仕事と言っても、雇用契約、業務委託、内職契約と、働き方は様々で、本人の希望を聞き、きめ細やかに対応しています。

専業主婦の頃、ママ友達が、それぞれいろいろなスキルを持っているにもかかわらず、それを活かす場がないのを見て、もったいないなあと考えたのが、「ままのえん」を立ち上げたきっかけです。私にはそんなスキルはないけれど、彼女たちが活躍できる仕組みを作ることはできるのではという思いを抱いたからです。

女性が自ら羽ばたくために

私自身のライフスタイルも、子供の成長とともに変化しています。With You さいたまの一室を女性団体活動拠点の提供事業(※)で事務所としてからは、仕

こばやし あゆみ 1977年長野県生まれ。大学卒業後、㈱ナムコに就職。営業職、店長を経験。結婚を機に退職、専業主婦歴7年。さいたま市へ転居後、2010年「ままの*えん」を任意団体として立上げ。12年「合同会社ままのえん」として法人化、代表となる。小学生二人のママでもある。「さいたま輝き荻野吟子賞」を『合同会社ままのえん』として受賞。（取材2016年）

事と家庭の切替えがうまくできるようになりました。ここに活動拠点があることで、取引先からの信用度も違ってきて、私にとってはステップアップのきっかけになりました。

部員の皆さんにも、母親とか仕事とか、1つのことに偏ることなく、いろんな場面で輝いてほしいと思っています。また、私自身が大事にしているのは、「自分軸で考えること」。自分が本当にそうしたいと思ったことと正直に向かい合って生きることです。

また、部員の皆さんに言い続けていることがあります。「卒業」です。ままのえんは、自分のスキルを掘り起こす場であって、いずれは巣立つことが、私たちの願いです。実際、これまでに起業や、就業、あるいは地域の自治会やPTA活動と、様々な形でここを卒業し、自ら活動を始める人たちがいました。

部員の皆さんのスキルやニーズを把握し、仕事に結びつけていくには、相当な労力を要します。けれども、1つの仕事を終えた時の達成感と、ここから羽ばたいていく彼女達をみることの喜びが、私たちの原動力となっています。いずれは、この地域社会と女性をつなぐシステムを各地に拡げていくのが私の夢です。1人でも多くの女性がチャンスに触れ、可能性を感じて、その人らしい生き生きとした豊かな生活を送れるように、このシステム作りの手助けがしたいのです。女性の活躍の場を増やすために。

※With You さいたまでは、県内各地の女性団体のネットワークの核となることが期待される女性団体に、当センターの1室を活動拠点として提供しています。

朝起きてまずすること

子どもたちをたたき起こす！

好きなスポーツ

バレーボール、ママさんバレーやってます

リラックス・タイム

ビールで乾杯！！

座右の銘

Cool head , but warm heart

5年後の私

子どもの部活の追っかけをしつつ、仕事を楽しんでいたいのです。子育ても一段落で、夫との時間も楽しんでいるかな。ゴルフ復活！旅行！

バイク！etc…



スタッフとの打ち合わせも「えん」を作って、和気あいあいと、かつ綿密に

第12回（平成28年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

高橋 理子

TAKAHASHI HIROKO（アーティスト）

固定観念を覆し考えるきっかけを生み出す

円と直線で描く無限の可能性



夢に向かってまっしぐら

小学校1年生の頃、TVでパリコレを見ました。その時、こんなに人が素敵に見える服を作るファッションデザイナーを目指そうと決めました。我が家は、何か欲しければ道具と材料を買いに行くという、ものづくりが当たり前の家庭でした。その後はひたすら夢に向かってまっしぐら。中学ではデザイン画も毎日1枚描き続け、今回吟子賞に推薦して下さった母校新座総合技術高等学校の服飾デザイン科に進学した美術部の先輩に影響を受け、1年生の時に志望校を決めました。そして、進学後の高校1年生の時、「布の勉強をすればオリジナルの生地で作りができるよ」「染織が学べる美大のトップである芸大を目指したら」と先生からアドバイスをもらい、3年間でしっかり服飾の基礎を身につけ、芸大に入学しました。

芸大の工芸科では、日本の伝統工芸と向き合う日々。ファッションデザイナーとして、西洋の文化である洋服で勝負するには、まず自分の国の文化である「着物」を知って、その知識を服作りに活かしていけば、世界に出ていった時に他国の人とは違う服作りができるのではと思ったからです。また、当時は着物をファッションとして若い人たちに着てほしいと考え、洋服の定番柄ともいえる「水玉」に着目しました。丸は幾何学模様、線との組み合わせでいろんな表情が出せる。これ以後、「円」と「線」と「着物」の可能性に興味を持つようになりました。洋服の構造を知っていたからこそ気づいた、生地の無駄がない着物の魅力。「オリジナルの柄の生地を丸ごと身にまといたい」という希望を実現することができました。

たかはし ひろこ 1977年生まれ。円と直線のみで構成された図柄により、独自の活動を展開するアーティスト。着物を軸にした創作活動のほか、日本各地の職人とのづくりを行うなど、その作品は海外においても高く評価されている。埼玉県立新座総合技術高等学校卒業後、東京藝術大学へ進み、大学院在学中に、仏外務省の招聘により、パリで活動。帰国後株式会社ヒロコレジ設立（現在高橋理子株式会社）

（取材2017年）

固定観念を打ち破っていくこと

中学時代、同級生におさげ髪の外見だけでおとなしい子と判断され、なんで見た目でも人を判断するんだろうと思いました。我が家では女の子らしくと言われたことがなかったので、学校で男女の性別で区別されることに違和感がありました。そういうものを心の奥に持ちながら伝統や和といわれる中で活動を始め、「伝統を革新しようとしている若き着物作家」というレッテルを貼られ、この世界にも固定観念があることに気がつきました。私は自分のメッセージを発信したい、その表現媒体として着物というツールを使っているだけなのに。

仁王立ちでの写真やマネキンの作品は、女性は女性らしくあるべきという刷り込みに対するアンチテーゼです。活動当初、プロのモデルに着てもらって撮影した写真が、いわゆる「はんなり」していて女性らしさはあっても、私らしくなかったことから、自分らしい仁王立ちを自らするようになりました。

世の中には、当然だと思い込まされていることがたくさんある。日常の固定観念を打ち破っていかないと新しい世界は見えてこない。みんなが縮こまって生きていく社会になってしまう。当たり前と思っていることにも疑問を持って考えることが必要。あらゆるものごとに対して、深く考えるきっかけを作っていくことが私のやりたいこと。仁王立ちの私の姿を通して、世の中に刺激を与えたいと思っています。

朝起きてまずすること

伸びをする

好きな食べ物

バナナ、カレー、あんこ

好きな映画

スターウォーズ、プラダを着た悪魔

リラックス・タイム

早朝のバスタイム

座右の銘

先義後利

5年後の私

植物園を作っている途中。子供たちに植物の大切さを通して地球環境を考えるきっかけを与えたい。



高橋さんの作品
ご本人が仁王立ちのポーズで

第13回（平成29年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

井原 愛子

IHARA AIKO（起業家）

いはら あいこ 埼玉県秩父市出身。起業家。「TAP & SAP(タップアンドサップ)」代表。大学卒業後、一度は秩父を離れて生活をしたが、秩父の木と人に魅了されUターン。国内初のシュガーハウス「MAPLE BASE（メープルベース）」をオープン。メープル事業のほか、「第3のみつ」といった地域資源を活かす商品開発や販売を行う。秩父の森のエコツアーも手がけ、秩父の魅力発信や情報発信に努めている。（取材2018年）

仲間とともに未来へつなぐ豊かな自然

～秩父メープルに魅せられて～



離れて気づいた秩父の魅力

秩父で生まれ育った私にとって、身近に山や森がある生活は、当たり前のものでした。就職で秩父を離れ、改めて豊かな自然の魅力、秩父の良さを感じるようになりました。

大学を出て就職したのは外資系家具販売会社。仕事は充実し、チャレンジできる環境がありました。一方で、ずっと同じ会社で働き、ひとつの世界しか知らないということに、どこか「このままでいいのか。もう少し違う世界を見てみたい。」という思いを持つようになりました。ちょうどそんな時、TVで見た秩父メープルを思い出し、NPO法人秩父百年の森主催のカエデの森をめぐるエコツアーに参加してみました。ここで、今まで気づかずにいた秩父の森の素晴らしさと、その森を大切に守る人々の活動や想いを知り、それが現在の私の活動につながっています。

秩父に自生するカエデの木から樹液を採取し、樹液やメープルシロップを使った商品を作る秩父メープルの取組。この画期的な取組は、広く知られておらず、また、若い担い手がいないことに危機感を持ちました。この取組を続けていくには、20～30年後を見据えた長期的な森づくりと、若い世代が活動を引き継ぎ、新しくお金を生み出す仕組みづくりが必要です。そこで、これまで会社で培ったマーケティングの手法を生かして私なりにできることをやってみようと思ったのです。そして、会社を辞めて秩父にUターン。新たなチャレンジを始めました。

人とのつながり、持続可能な仕組みをつくる

森づくりやメープルなどの自然の恵みを生かした商品づくりを通し、多くの人たちとの出会いがありました。会社を辞め、後戻りできない覚悟で飛び込んだ私の想いに本気で応えてくれた人たちがいたからこそ、国内初のシュガーハウス(※)「MAPLE BASE(メープルベース)」の実現など、様々な事業が現実のものになりました。

先のことを考えると不安もあります。でも、私には同じ思いを持って活動する仲間がいます。仲間と一緒に取り組むことが、今の活動を続けるための大きな鍵だと感じています。そして、新しい仲間が一人でも増えると嬉しいし、一緒に関わって良かったと思ってもらえることが、私のモチベーションになっています。

これまで長く培われてきた活動を土台に、若い世代を巻き込み、仲間を増やし、カエデの森をビジネスとしても次世代に引き継ぐ仕組みを作っていけるのか。まだまだ多くの課題があり模索が続きます。そこに、私が少しでも役に立ちたい。

また、まだ知られていない秩父の自然の豊かさや森の恵みを多くの人に知ってもらうため、飲んだり、食べたり、体験したりできる商品やツアーなどのプロデュースにも力を入れたいと思っています。これらの取組は、ひとりの力ではできません。いろいろな人とのつながりや交流を大事に、着実な取組で地域に貢献していきたいです。

※シュガーハウス：メープルシロップを製造する小屋。「MAPLE BASE」では、本場カナダから製造機械を輸入。森の恵みを味わえるカフェやショップを併設し、五感で体験できる秩父のメープルブランドの発信拠点になっている。

朝起きてまずすること

音楽を聞く

好きな食べ物

野菜、豆、アイスクリーム

リラックス・タイム

温泉、海外にいくこと

尊敬する人

母

5年後の私

森づくりや仲間が広がっている。海外とビジネスの交流を持っている



ミツバチに林檎ジュースなどを与えて生まれた第3のみつ、『秘蜜』。井原さんがプロデュースしている。

第13回（平成29年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

海老原夕美

EBIHARA YUMI（弁護士）

司法の場に多様性を

～ひとりひとりに寄り添って～



女性弁護士として歩んで

私が社会に出た頃は女性が自立して生きることが難しい時代でした。大学卒業後、会社に勤めましたが、当時の女性の仕事は「お茶くみ」のような仕事ばかり。将来自立することを考えると長く働き続けることは難しいと思い、検事だった父の影響もあって司法試験の勉強を始めました。弁護士を目指したのは「人のためになる仕事は、教師か弁護士」という母の言葉があったからです。法廷ドラマ「ペリーメイスン」を見て、弁護士への憧れもありました。

私が弁護士になった頃、女性弁護士は全体の1割もいませんでした。女性の弁護士は「本当にちゃんと弁護してくれるのか」という依頼者の目を感じることもありました。それでも目の前の事件に真摯に取り組む続け、ある困難な事件で勝訴判決をもらった時、依頼者から「最初は頼りないと思ったけど、すごくよくやってくれた」と感謝されて、とても嬉しかったことを覚えています。

30年前に担当した刑事事件では、被告人の女性の調書に現実にはあり得ないことが書かれていました。それは出産に関する事柄で、出産経験のある私が担当になるまで、その明らかな誤りに気づく捜査官はいませんでした。結果的に、その女性は無罪となりましたが、司法関係者が男性だけだったら、この明らかな誤りに気付かず冤罪を生んでいたかもしれません。この事件

えびはら ゆみ 弁護士。埼玉弁護士会初の女性会長、日本弁護士連合会副会長、両性の平等に関する委員会委員長を歴任。1982年の弁護士登録以来、女性も男性とともに生き活きと暮らしていける社会をめざして活動。DV被害者の支援に積極的に取り組み、DV防止法の制定を強く訴えた。その後も、代理人としてDV被害者の立場に寄り添った活動をしている。また、早くから子どもの権利の問題にも力を注ぎ、NPO法人「埼玉子どもを虐待から守る会」の会長として活動するほか、「子どもシェルター」の開設にも尽力した。

（取材2018年）

で女性弁護士を含め、司法の場に多様な経験を持つ人がいることの重要性を痛感しました。

DV被害女性に寄り添って

2008年に埼玉弁護士会で初の女性会長になりました。弁護士になった頃から、埼玉弁護士会の子どもの権利委員会を中心に、両性の平等委員会の創設など様々な委員会の活動に取り組んできたことが評価してもらえたものと思います。

DV被害者支援に力を入れるようになったのは、受任する離婚事件で夫からの暴力の問題が非常に多かったこと、そして女性への暴力は許しがたい人権侵害だと思ったからです。1995年には第4回世界女性会議（北京会議）に参加し、翌年から日本弁護士連合会（日弁連）の両性の平等委員会に参加するようになりました。そこでDV防止法の制定に向けて取り組んだのです。

これまで多くのDV被害女性の相談を受けてきました。依頼者の立場に立って話を聴きながら、将来は前を向いて歩いて欲しいという思いで、問題解決に向けた話をしています。夫からの暴力に悩み、初めは暗い顔をして事務所を訪れた女性たちが、問題が解決していくにつれて徐々に元気を取り戻し、最後には明るい顔つきに変わっていくのは嬉しいですね。DVが子どもに与える影響も深刻で、子どもへのケアに力を入れて取り組む必要があると感じています。

この他にも、子ども虐待防止や若年女性支援に取り組んできました。その根底には「弱いものいじめは許せない」という思いがあります。先輩の女性弁護士たちは女性の権利を訴え、大変な努力で社会を変えてきました。日弁連でも役員に女性枠を設けるなど、組織として変わりつつあります。女性が当たり前前に男性と対等に生きられる社会をこれからも目指していきたいと思っています。

朝起きてまずすること

ニュース番組を見る

好きな食べ物

しゃぶしゃぶ

好きな映画

風と共に去りぬ

リラックス・タイム

ゴルフ

尊敬する人

マザー・テレサ



第14回（平成30年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

倉橋 香衣

KURAHASHI KAE（ウィルチェアーラグビー選手）

“楽しい”をいちばんに



写真：鷹羽金藏

車いすラグビーと出会って

元々スポーツが好きで、自立訓練施設のリハビリでは四肢麻痺状態でもできる水泳や陸上などを経験していました。そのような中で、車いすラグビーを初めて見た時、車いすがぶつかっている様子に「ぶつかっても怒られなくていいな。」と、すぐに惹かれました。試合では、車いす同士が激しくぶつかりあって 転がることもあり、それがとても面白かった。自分で始めてみると、動きもルールもわからないことだらけ。もっと知りたくて、のめり込んでいきました。何より 車いすラグビー自体が楽しくて、とにかくやりたい気持ちが強かったのです。

母の勧めで始めた体操を高校まで続け、大学ではトランポリンをやっていました。その練習中に大怪我をしたため、母は体操を勧めたことを後悔していました。寝たきりの状態でようやく話ができるようになった頃、悲しむ母に「体操で鍛えた首の筋肉があったから生き延びられた。別にいいやん。」と声をかけました。私自身、日頃から後悔や愚痴も多いのですが、最終的には「まあ何とかなるやろ。」と過ごしています。

くらはし かえ 越谷市在住。大学在学中、トランポリン競技中の事故により頸髄を損傷し、四肢麻痺状態となる。自立訓練施設にて始めた車いすラグビーでその実力が評価され、女性初の日本代表に選ばれた。「GIO 2018 IWRF ウィルチェアーラグビー世界選手権」では日本代表の初優勝に貢献した。（取材2019年）

母にも「あんた見とったら何とかなるやろと思うる。」と言われたことを覚えています。

楽しむことを大切に

車いすラグビーは男性と女性が混合でチームを編成して競い合う競技。現在、国内では私を含めて女子選手が3人います。私は現在、クラブチーム「BLITZ(ブリッツ)」に所属しています。選手はひとりひとり障害の程度や状態が違います。チームメイトの力の強さや動きの特徴を頭に入れ、選手はそれぞれ自分がどう動くかを考えます。相手チーム選手の動きを先読みして、ブロックできた時は嬉しいですね。

日本代表の選考に呼ばれた時は、「え、なんで」と驚きましたが、呼ばれたからには頑張ろうと思いました。今の目標は、2020年の東京パラリンピック出場です。代表チームに必要な選手になるために、課題をクリアできるよう努力したい。今、日本代表チームは金メダルを目指して練習しています。勝って、コートの中でチームのみんなと喜びたいです。

私が選んだのは車いすラグビーですが、障害によってできるスポーツも違います。障害のある人も、その人の特性に合った競技や趣味に出会えて、楽しみが増えたらいいと思います。多くの人に、好きなことや知りたいこと、楽しいことに会って欲しいですね。



朝起きてまずすること

ストレッチ

好きな食べ物

もずく、ところてん、貝

リラックス・タイム

動物に触る。旅行。

尊敬する人

両親

5年後の私

体を動かすことが好きなので、ずっとラグビーをしているかもしれないし、していないかもしれない。その時々楽しいことを見つけている。



第15回（令和元年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

石 田 七 瀬

ISHIDA NANASE（ものづくりコーディネート会社経営）

“人も技術もつなぐ 「町工場のお医者さん」”



機械装置の製造メーカーやプレス加工工場で、15年以上購買を担当してきました。当時、何も分からなかった私は、協力会社の町工場の方々から、原材料や加工方法、機械の種類など、様々なことを教えていただきました。

そのうち町工場からも、「加工先がないんだけど、どこか知らない？」と相談されることが増えてきたんです。実はものづくりの町で有名な川口市だけみても、最盛期から70%以上町工場が減少しているんです。

当時、勤務していた会社でも、協力会社さんの高齢化のために、先のことを考えると、新しく加工可能な先を探さなければいけないことが増えてきました。マッチングをやっている会社さんや、コンサルタントの方にご相談したものの、なかなか自社にピッタリの所が見つからない。自分で探した方が良いところが見つかり、取引につながったということが続いていました。「何かこう、うまく町工場を『つなぐ』会社ってできないかな？ 町工場が減って加工先も減っているけれど、そうしたら、みんながWIN-WINになれるかも？」と夫に相談したところ、「やってみたらいいじゃない」となり、今の会社を立ち上げたのが2年前です。

子育てと仕事って、一見、別のように見えるけれど、実は似ています。子供も同じ子っていないように、お客様もみんな違います。子供に何かを伝える時、直球で言って分かってくれる子、例を挙げながら時には変化球を投げないと分かってくれない子、同じ兄弟でも違います。

いしだ ななせ 川口市在住。ものづくりコーディネート会社(NANASE株式会社)経営。年々減少する町工場が抱える悩みを解決し、後世までその技術と知恵を伝えるため、「町工場のお医者さん」を目指し日々活動中。6人の子育ての経験を生かしつつ、男性社会の町工場で職人気質の人々と、きめ細やかなコミュニケーションを図りながら活躍している。（取材2020年）

お客様も一緒。同じ球で解決できることはほとんどありません。その会社によって投げる球も、アプローチ方法も違う。その種類が多ければ多いほど、解決できることも多くなる。

1つ投げてダメでもめげない所は、6人の子育てで鍛えられてきたからだと思います。

今できる最善のことを提供して、相手が見えていない引き出しを開き、何ができるか一緒に考える。私が目指しているのは町工場のお医者さんです。ちょっとしたことでも、いつでも相談していただける存在になりたいと思っています。

その一環として子供たちがものづくりをしたいと思う世の中を作ること、うちなんて……と思っている町工場さんに「日本のものづくり技術は大切なんだ」と啓発・啓蒙していくのも私たちの仕事だと思っています。そういう意味で、私はコーディネーターであり、時にはお医者さんでもあると思っています。

お話している中で「元気もらえた!」「パワーもらえた!」という方が一人でも増えていただけたらいいなと思っています。

今後は、工場の中で一杯飲みながら、ものづくりについて語る『町工bar』や、子供たちが手軽にもものづくりを体験できる『ものづくり基地』を作りたいと思っています。

町工場の人って近寄りがたい雰囲気があるという方もいるのですが、実は皆さんシャイなだけで良い方たちなんです。そういう方たちと交流できる場所を作りたいと思っています。

つながりって大切で、「人と人とが関わることでできるものってすごいんだよ!」ってことを、実際に体験しながら伝えられる場所を提供できたらと思っています。

朝起きてまずすること

子供たちを起こす
リラックス・タイム
走っている時

好きな食べ物

いちご
尊敬する人
母

好きな本

中川淳「小さな会社の生きる道。」

5年後の私

このまま、私は私の道をいく!
そのとき感じた正しいことを信じて、目の前にある悩みを解決しながら、このまま進んでいるのかなと思います。自分が思ったことをやって楽しく生きてるはず。楽しくなきゃ人生じゃない!



第16回（令和2年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

竹内 舞子

TAKEUCHI MAIKO

（国連安保理北朝鮮制裁委員会専門家パネル委員）

パッション

若者の情熱を生かす道を拓く



自分が不利にならないセッティングを作る

大学を出る際に、それまで私がお世話になった社会に恩返しをしたいと考え、国にとって一番大事なことは国を守ることだと思い、防衛庁(現:防衛省)に入りました。

今は国連の専門家パネル委員となり立場は変わりましたが、日本という国を守りたいという思いは今も変わっていません。

日本だけでなく世界的にみても、安全保障の分野は男性や軍人が多いです。これまでの20年のキャリアの中でも、性別や年齢、人種などで、自分が弱い立場に置かれてしまうような扱いを受けることは多々ありました。でも「私はいろいろなキャリアを積んでここまで来た。年齢が若くても、女であっても、この仕事をする能力や知識では決して負けていない」という自負がありました。

仕事では一回一回の面会が真剣勝負です。特に北朝鮮問題のように政治的にも難しい話題で、説得的な議論をするには準備が必要です。自分が不利にならないような「場」をつくる工夫や、相手が納得するような知識、服装、話し方等いろいろなことを考えながら、相手のこともよく勉強し自分の主張をわかってもらう。男性と同じことをする必要はないし、自分のキャラを変える必要もない。私は自分がどういう状況で強みを発揮できるかということを考えながら働くことで、苦しい思いを少しずつ変えていきました。

たけうち まいこ さいたま市出身。東京大学法学部卒業後、平成13年に防衛庁(現:防衛省)に入庁。常に女性初となるポストを歴任し、安全保障や外交の現場でキャリアを重ね、平成28年、日本人女性初かつ最年少で、国連安保理北朝鮮制裁委員会専門家パネル委員に選出される。制裁の履行状況に関する調査や諸外国政府との協議において主導的役割を果たし、国連による平和の取組に尽力している。(取材2021年4月)

世界にはまだまだたくさん 自分の思いを生かせる場所がある

私はこれからも、引き続き軍縮や安全保障の分野で仕事をしていきたいと考えています。国連に限らず、世界のいろいろな所で、平和な世界を作りたいという情熱を持って活動している日本人の方はたくさんいます。そして、平和な世界を作るために働きたいという思いを持っている学生の方もたくさんいると思います。私はそういう人たちをサポートできたらと思っています。

今もいろいろな形で学生の支援をしていますが、その活動を続け、「世界にはまだまだたくさん、自分の思いを生かせる場所がある。道はいろいろある」と次の世代の人に伝えて行きたいです。それは単に機会があることを知るだけではなく、これから自分がどんな教育を受け、どんなスキルを磨いていかなければならないかにもかかわってきます。だから、何かをしたいという情熱・パッションを、どう実際の仕事に繋げていくかを伝え、これから巣立っていく、若い世代の特に女性のいろいろな思いを、国際的に生かす手助けをするような仕事ができればいいなと思っています。

専門家パネルとは？ 国際連合安全保障理事会15か国で北朝鮮の制限について扱う北朝鮮制裁委員会の仕事を補佐するため、8名の委員で構成されたグループ。パネル委員は国をはじめ誰からの影響も受けず、独立性の立場から北朝鮮に対する決議—国連が決めた約束事が守られているかを調査報告している。

朝起きてまずすること

家族で「おはよう」を
言い合う

好きな食べ物

焼肉

好きな映画

『確黄島からの手紙』

好きな本

金子みすゞ

『私と小鳥と鈴と』

リラックスタイム

おいしい緑茶を淹れる

5年後の私

学生、特に女性のキャリア成を支援したい



第16回（令和2年度）さいたま輝き荻野吟子賞受賞

山口 絵理子

YAMAGUCHI ERIKO

（マザーハウス代表兼チーフデザイナー）

どんな時でも 今できることはゼロではない



可能性を信じる人間であり続ける

マザーハウス設立のきっかけは、大学時代にバングラデシュへ行き、安いモノが大量に生産される現場を見て、もっと付加価値を上げることができないかと感じたことです。援助だけでは解決できないし、モノづくりによって彼ら・彼女らは経済的自立を目指せるはずだ、と思いました。私は可能性を信じる人間でありたいし、やればできるということを、強く確信しています。

また、バングラデシュは自然災害やテロが多い国で、毎日が生きるか死ぬかという瀬戸際でした。日本で大学生だった時は、小さな競争社会にいたので、その対比が激しくて、日本での自分の悩み事って相当小さいなって、どうでもよくなりました。異文化の人と触れ合うと、自分の視野が狭かったことに気づかされますから、そういう経験を若いうちにするといいのかなと思います。

バングラデシュで大洪水の時に、浸水しているので家で待機していたのですが、そんな時でも学校にみんな来ていたんです。次の日に私が行くと、「なんで休んだの。学校で教育を受けるっていうのはやっと掴んだチャンスで、本当にラッキーなことなんだから、1日でも休むのはもったいない」と言われました。彼らには、がむしゃらさやハングリーさを教えてもらいましたし、日本の普通が普通じゃないことを学びました。

やまぐち えりこ さいたま市出身。大学のインターン時代、途上国援助の矛盾を感じ、アジア最貧国と言われていたバングラデシュに渡る。必要なのは金銭の支援だけでなく、「現地にある素材や職人の技術を使ったモノづくり」だと感じ、平成18年に「途上国から世界に通用するブランドをつくる」を理念としたマザーハウスを設立。バングラデシュから始まり生産体制はインドやネパールなど6カ国に広がり、販売国も日本、台湾、香港、パリなど40店舗以上を展開している。（取材2021年）

長期スパンの目標をたてる

現代社会において時間の感覚は非常に短くなっていますが、10年くらいの単位で成果がでてくるものってたくさんあると思います。だから、急がすような意思決定をすることは避け、ちゃんと吟味し、継続を目標にやっていきたいです。腰を据えて「10年間で何をやりたい?」と考えることは、大事なこともかもしれないと思います。

世界11カ国とモノを通して本気で仕事ができるっていうのは素晴らしい多様性のかたまりですし、自分が25歳の時に描いた夢に乗ってくれて、一緒に夢を追いかけるかけがえのない仲間がいるというのは、一番大きなラッキーだと思っています。ひとりなら乗り越えられないことも、チームみんなが家族のように支え合えば乗り越えていける。私たちは単に物販をしているのではなくて、お客様と一緒にコミュニティーを作っているという感覚でビジネスをしているので、国を越えての絆やアジアの職人みんなの頑張りがお客様の笑顔につながるみたいな、そういう笑顔の循環体系が資本主義の中でできたら素敵だなと思っています。

バングラデシュで非常事態宣言になった時に、会社が潰れちゃうかもっていう危機というか絶望感がありましたが、その時に、じゃ今できることって本当にゼロかなということを何度も考えました。「どんな時でも今できることはゼロではない」って言葉を、若い人たちに贈りたいなって思います。

朝起きてまずすること

散歩

好きな食べ物

卵

好きな映画

『ワンダー君は太陽』

リラックス・タイム

絵を描く

尊敬する人

両親

5年後の私

マザーハウスの絆がさらに強まっている世界にいる



令和3年度埼玉県荻野吟子賞（個人・団体部門）大賞 受賞

佐藤麻里子

SATO MARIKO（有限会社佐藤酒造店杜氏）

日常にそっと寄り添う
優しいお酒を造りたい



「正解」がないことが楽しい

高校生の時から実家の直売店でお客様と話したり、「おいしいね」と声をかけていただけたりすることが嬉しく、徐々にお酒の中身にも興味を持つようになりました。せっかくだったら一から携わったお酒を飲んでいただきたいと思うようになり、父である社長もその後押しをしてくれました。

私は杜氏になって8年目ですが、毎年が勉強です。伝統のある技術をたくさん経験し、積み重ねていくことが大切だと思っています。お酒は造るたびに表情が違います。数時間後でも様子が全く違うのです。麹は生き物なので少しでも管理を怠ると出来上に影響が出てしまいます。原料となるお米も気候によって毎年異なり、その都度造り方を変えなければなりません。お酒と酒粕に分ける作業を終えるまでどんなお酒になるかはわかりませんし、万人の口に合うということはなかなか難しい。酒造りには答えがないし「正解」というものもありません。大変な部分もありますが、そこにお酒の奥深さを感じ、魅了されました。

酒蔵はごく最近まで女人禁制というのがあり、蔵によってはまだ女性が入れないところもあります。そういった意味では、両親や祖父母、蔵人たちの考えがとても柔軟だったのだと思います。働きやすい環境を作ってくれている周囲の存在は本当にありがたいです。

さとう まりこ 越生町在住。大学在学中に、彩の国酒造り学校で酒造りの基礎を学び、平成27年に実家である有限会社佐藤酒造店に入社。酒造りは男性が行うものという考えが強い酒造業界において、県内初の女性杜氏となり、現在は酒造りの責任者として蔵人を率いる。2019年・2020年には全国燗酒コンテストで金賞を受賞。女性や若い世代のニーズに応える酒造りに取り組み、銘酒「越生梅林」を守りながらも、自ら新商品の開発やデザインも手掛ける。（取材2022年）

伝統と革新の両立に努めたい

私自身、日本酒は大好きですが、たくさんの量を飲むわけではありません。そういう人たちがお酒を選ぶ基準ってなんだろう?と考えたときに、まずはパッケージ（見た目）のデザインだと思いました。入社してまずはそこから変えていきたいと思い、社長に相談をしたところ「若い蔵人たちと一緒に自分たちの感性でやってみなさい。」と、賛成してくれました。海外からのお客様も増えてきているので、『OGOSE BAIRIN』と英字表記も取り入れました。パッケージデザインに力をいれたことで「日本酒メーカーとしてはスタイリッシュだね」「斬新的なデザインだね」と言ってもらえるようになりました。

昔から「清酒 越生梅林」をご愛飲いただいているたくさんのお客様がいらっしゃる中で、昔ながらの伝統を守りつつ、日本酒初心者や女性が飲みやすいような味わいの酒造りにも力をいれています。これからも、伝統と革新の両立に努め、幅広い世代のお客様に愛される酒造りをしていきたいと思っています。

創業当初より、「ふくらみがあり、後味の軽い酒」をモットーとしていますが、料理の邪魔をしないお酒を目指しつつ喜怒哀楽の場面にそっと寄り添えるような優しいお酒を醸していきたいです。これからもシェアを広げていき、全国でそして海外でも「埼玉に『清酒 越生梅林』あり」というてもらえるようになれたらいいなと思っています。

朝起きてまずすること
散歩

好きな映画・本
『トワイライト』

リラックス・タイム
ドライブ・カメラ

尊敬する人
両親

5年後の私

日本酒業界を盛り上げ、次の世代に引き継いでいけるような存在になる。



令和4年度埼玉県荻野吟子賞（個人・団体部門）大賞 受賞

名知 仁子

NACHI SATOKO (医師)

人間の可能性を信じ 命を使う



名知仁子さん写真MFCG ©2023

人間の可能性に気づかせてくれた場所

平成14年（2002年）に国境なき医師団に入り、最初に派遣されたのが、ミャンマーとタイの国境沿いにある難民キャンプでした。そこには本当に何もありませんでしたが、そこで暮らす難民の彼女/彼らから人間の可能性を教えてもらいました。

彼女/彼らは、学校がないので数も数えられないし、年齢を訊いてもわかりません。もちろん英語も話せません。でも、教えると次第に体重計の数値が読めるようになり、英語が話せるようになり、最終的には顕微鏡でマラリアや結核を見つけたり検査技師のような役目ができるようになりました。彼女/彼らを通して誰もが人間としての可能性を持っているのだということを教えてもらいました。

さらに、私はそこで聴診器一本で人を診るという医療の原点も学びました。何もない中で、コミュニケーションをとりながら、聴診器一本で診断することはとても勇気がいります。日本だったら助かる命もここでは助かりません。国際医療の現場は、生活環境も含めて考えていた以上に厳しくつらいことも多いのですが、それ以上の喜びを得られます。

なち さとこ 狭山市出身。約11年間勤務した大学病院を辞め、平成14年に国境なき医師団に参加し、ミャンマー難民の支援活動に携わる。平成24年に「NPO法人 ミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会（MFCG）」を設立。ミャンマーの無医村で巡回診療を行い、これまで40,000人以上を診察。手洗いなど保健衛生の指導や有機野菜栽培の農業指導も行っている。令和3年2月以降、政情不安定な同国において、自身も病と闘いながら、献身的な活動を継続している。令和5年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰を受賞（取材2023年）

命をどう使うか

癌になって人生をもう一度考えた時に、自分に人間の可能性と医学の原点を教えてもらったミャンマーの人たちに恩返しをしようと思いました。

「使命」とは命を使うと書きます。私は人生には目的があって、それに向かって命をどう使うかだと思うんです。たった一度の人生をどう使うか、それを自分で見つけるのはすごく大切なことだと思います。

若い世代に伝えたいこと

一番は恐れないこと。どんなことでもトライ＆エラーだと思います。「国境なき医師団」で日本人は私で5人目です。最初に私がやりたいと言った時には、父親はもちろん、まわりの人たちからも、10年間のキャリアを捨てるのか、と反対され賛成してくれた人はゼロでした。でも、もし本当にやりたいことがあるならば、失敗を恐れずに、トライ＆エラーでやってみてほしいと思います。私は人生で無駄なものは何もないと思っています。

もうひとつは、すぐに諦めてしまわないこと。自分が考えていたよりも大変だったということはたくさんあります。あまりに早く諦めすぎると、夢を見つけるのが難しいと思います。できるかでなく、本当にやりたいものに向かって、ひとつひとつ前に（横かもしれないけれど）進んでいって欲しいです。

最後に私は60歳になりましたが、もっともっと日本とミャンマーを繋げたいと思っています。日本とミャンマーが、いいところをお互い引き出せるような、輝かせることができるような、そういう社会を一緒に創っていったらいいなと思っています。

朝起きてまずすること
のび

尊敬する人
父とマザーテレサ

リラックス・タイム
瞑想と空を見上げること

好きな映画・本
オードリー・ヘップバーンの映画 / 『ペイ・フォワード』

5年後の私
内面が明るく、より輝いて、透明感のある私



令和5年度埼玉県荻野吟子賞（個人・団体部門）大賞 受賞

佐藤 咲子

SATO

SAKUKO

（一社）犯罪被害者等支援の会オリーブ代表理事

支援は「こころ」を 差し出すこと



45年分の涙

私は15歳の時に両親が強盗犯に射殺されました。祖父母は他界しており、兄とふたり、支援など何もない状態で放り出されました。当時は公的な支援金もなく、警察や自治体などの相談窓口もありませんでした。自分の無力さを悔しく思うと同時に、親が殺されたのは因果応報だと言われた経験もあり、自分のせいで不幸が起きたと思われたくなくて過剰にがんばったりしていました。

2005年、犯罪被害者等基本法成立の翌年、自分のような犯罪被害者の支援がしたいと思い、被害者支援都民センター^(*)を訪ねました。両親の事件から40年以上が経ち、自分にも何かお手伝いができるかなと思っていたら、「あなたはまだ心の処理ができていません。自助グループに入って心のケアをしてください」と面接で言われました。自助グループに通うようになり、私は初めて事件について同じ犯罪被害者の前で話しました。それから3年後、今までずっと出なかった涙が出たのです。「やっと涙がでるようになったね。佐藤さんよかったね」と仲間にも言われました。両親の事件から45年もの歳月が流れていました。

(*)現・公益社団法人被害者支援都民センターのこと。日本で初めて東京都公安委員会から「犯罪被害者等早期援助団体」の認定を受け、現在は犯罪被害に関する東京都の総合相談窓口の役割も担っている。

さとう さくこ 狭山市在住。少女時代にご両親を殺害された経験を踏まえ、平成26年に「犯罪被害者支援会オリーブ」を設立（令和4年に一般社団法人化）。学習会や講演会活動、教材作成等を通じ、多くの市民に犯罪被害者支援の必要性を訴えている。狭山市犯罪被害者支援条例の制定や埼玉県犯罪被害者支援条例に基づく指針の策定にも貢献した。犯罪被害者支援を通じて男女共同参画社会の基盤である、男女の人権を尊重した活動に積極的に取り組んでいる。（取材2024年）

犯罪被害者が、安心して話せる場所を作る

犯罪被害者等支援の会オリーブでは、講演会や公開講座、交流会などを中心に活動しています。他にも愛する人を失った時の心の状況を言葉にした「命のメッセージ」展も開催しています。東京都では「命の大切さを学ぶ教室」を中高生対象に行っており、そこで講演させていただいたりしています。

私自身、親を突然亡くしているので、「家族や大切な人に『ありがとう』を言うのも『ごめんなさい』を言うのも今日のうちに」と伝えています。

また、今年は狭山市で自助グループの立ち上げを考えています。犯罪被害者だけ来てくださいというのは難しいので、家族を亡くして寂しさを感じている人などにも門戸を開き、声をあげられない方への支援をこつこつやっていきたいと考えています。

私たちにできること

犯罪被害者の講演や講座があったら、どうか足を運んでみてください。「自分には関係ない」ではなく、自分の身に置き換えて聴いてみることから始めていただけないでしょうか。支援というのは「こころ」です。まずはあなたの「こころ」を差し出してください。被害者は、行政を含め、みんながあなたを応援しているよという、周囲のあたたかい眼差しを必要としているのです。

もしかしたら私も明日死ぬかもしれないし、この先どうなるかはわかりません。でも、二度と戻ってこない時間—その瞬間、瞬間を大切にして生きていきたいです。出会った人を大事にして、お互い助け合っていけたらいいなと思っています。

朝起きてまずすること

自分に命が与えられていることを感謝し、家族が守られることを祈ります

尊敬する人

渡辺和子さん（キリスト教カトリック修道女・ノートルダム清心学園元理事長。故人）

リラックス・タイム

畑で近所の方たちと野良カフェを開いてくつろぐこと

好きな映画・本

「一粒の麦 荻野吟子の生涯」
「置かれた場所で咲きなさい」

5年後の私

100歳体操のサポーターとして元気に指導を続け、筋肉を蓄え、明るいおばあちゃんになる



令和6年度埼玉県荻野吟子賞（個人・団体部門）大賞 受賞

桑井 亜乃

KUWAI

ANO

アルカス熊谷所属ラグビーレフリー

世界で活躍する 女性レフリーの道を拓く



ラグビー選手からレフリーへ

大学の時、体育の授業で初めてラグビーというスポーツを知りました。当時は陸上競技（円盤投げ）をしていましたが、2016年からラグビーがオリンピック種目に正式に採用されたこともあって、2012年から本格的にラグビーを始めました。

練習はとてもきつかったですが、日々できなかったことができるようになっていくという楽しさや、ラグビーの面白さ、奥深さを知ることができました。きつい練習を乗り越えたその先に、オリンピックがあったという感じです。

引退して何をやるか迷っていた時、今のコーチが「世界で活躍するレフリーに興味はないか」と誘ってくれました。「3年後のオリンピック（パリ2024）に出られる可能性はありますか？」と聞いたら、「不可能ではない」と。「どんなに難しくても、少しでも可能性があるんだったら、オリンピックにチャレンジしたいです」とお話をし、そこから私のレフリー人生が始まりました。

選手の時には気づかなかったことや、レフリーになって初めて知ったこと、感じたことはたくさんあります。まず、試合にはレフリーもしっかり準備をして舞台に立っているということです。そして、試合で評価されるのは、選手もレフリーも同じだということです。選手の時に立ったオリンピックの舞台に、レフリーという立場で出場できたのは、人生を2倍楽しめている感じがします。

くわい あの 熊谷市在勤。ラグビー界では男女含めて世界で初めて、選手とレフリー両方でオリンピックに出場。選手としてはリオ2016オリンピックに出場し、レフリーとしてはパリ2024オリンピックで主審を務めた。レフリーに転じて以降、男子プロチームの埼玉パナソニックワイルドナイツなどの練習に参加しハイレベルなトレーニングを行なったほか、海外留学をするなど研鑽に努めた。現在も、男子プロリーグのリーグワン2024-25シーズンで女性初の審判に選出されるなど、前人未踏の挑戦を続けている。内閣府特命担当大臣（男女共同参画）表彰、令和7年度「女性のチャレンジ賞」受賞。

強く、美しく

ラグビーは男性のスポーツというイメージがあると思いますが、レフリーも同じです。私はリーグワン(2024-25シーズン)で初の女性レフリーですが、正直なところ苦勞だらけです。最初にレフリーに入った時の記事には、「女性が男性のスピードについていけるの?」とか、「本当に女性がレフリーできるの?」「大丈夫?」などのコメントが多くつきました。

私は女性もレフリーができると知ってもらいたいし、会場に来て、見て、それを感じ取ってほしいです。そして今後、女性レフリーが入った時に、こうした色眼鏡がなくなればいいと思います。

私はレフリーとして、「強く、美しく」ありたいと思っています。強さというのは準備の段階から出てくると思っていて、グラウンド以外でも芯が通った行動をしていれば、グラウンドの上で強く見えると思っています。美しくというのは、所作も含めて、頑張っている姿が美しくありたいです。

女性のレフリーの道を拓く

現役の選手たちは、そもそもレフリーに興味がないことがほとんどです。でも、私がレフリーをすることによって、選手引退後にレフリーになってオリンピックに行く、という新しい道ができたと思います。コーチに「あなたがこの壁を突破しないと、女子が男子（リーグワン）の中に入るのに、この先何十年もかかってしまう」と言われて、絶対に達成したいという目標に変わりました。

チャレンジしないと見えない景色はたくさんあるので、これを読んでくださっている方も、もしやりたいことがあるなら、やってみたらいいと思います。私は「初」という言葉がすごく好きです。世界で初めて、選手とレフリーの両方でオリンピックに出場は、ラグビー界にとって大きなことだったと思っています。

朝起きてまずすること

鏡を見る
好きな食べ物
肉
尊敬する人
いっぱいいます

リラックス・タイム

犬と散歩しながら
コーヒーを飲む
60歳の私
子供や孫に囲まれて
団らんをしている



令和7年度埼玉県荻野吟子賞（個人・団体部門）大賞 受賞

眞子 桂子

manago

keiko

医療美容師・整容相談員・セラピスト芸人

美容、福祉、笑い

すべては「誰もが自分らしく生きられるように」という思いから。



医療美容師へ

私はもともと見た目に悩み、自分自身のためにケアを続けてきました。美容師になってからは、美容には見た目を整えるだけでなく、人の心を支える力があると実感し、それが現在の医療美容師やアピアランスケア※1の活動につながっています。子育て中には介護施設で働き、40歳の時に介護と子育てが重なり心身を壊した経験から、同じ苦しみを抱える人を支えたいという思いを強く持つようになりました。その思いから2015年に訪問美容を開始し、2017年には抗がん剤治療による脱毛など外見の悩みを安心して相談できる完全予約制の「けあるーむ KAMI結」を開設しました。

アピアランスケアの原点は、生まれつき髪が少なかった次女の実験です。娘のためにウィッグを工夫して作った経験が、今の支援活動につながっています。見た目に悩む患者さんが「外に出られそうです」「社会復帰できます」と笑顔を取り戻す姿は、娘が自信を取り戻していった姿と重なります。その後、医療美容師の資格も取得しました。何よりも大切なのは相手の気持ちに寄り添うことです。私は、ここに来てくださる方を家族のように思いながら、一人ひとりと向き合っています。

※1 アピアランスケアとは・・・がん治療による外見の変化に対する苦痛を、医学的・整容的・心理社会的支援を用いて軽減するケアのことです。
※2 Ally(アライ)とは・・・英語で「同盟」や「味方」を表す言葉で、性的マイノリティを理解し、支援している人、又は支援したいと思う人のことを指します。

まなご けいこ 東松山市在住。美容と福祉の経験、そしてケアラー当事者としての視点を活かし、医療美容師・整容相談員・セラピスト芸人「千と桂」として活動。訪問美容やアピアランスケアを通じて高齢者や治療中の方を支援するほか、学生服の選択肢拡大など子どもたちの学校生活を支える取組にも携わる。絵本出版や芸人活動を通じてケアラーのセルフケアを発信し、M-1グランプリ「ナイスアマチュア賞」を受賞。東松山市商工会PR大使・東松山市応援団員。

整容相談員、セラピスト芸人、活動は広がる

性的マイノリティの方からの相談も多く、「女性らしい髪型にしたいけれど美容室に行きづらい」「自分らしく過ごしたい」といった声に寄り添っています。安心して利用していただけるよう、Ally(アライ)※2を掲げ、一人ひとりが望む姿を大切にしています。また、“ケアする人”の支援にも、私は整容相談員と名付け取り組んでいます。身だしなみや表情の変化から心身の状態を見守り、必要に応じて地域の支援機関につなげています。

活動は美容だけにとどまりません。娘の中学校進学時、学校指定の制服は女子用スカートのみで、娘が希望したズボンが「前例がない」と認められませんでした。私は「子どもたちが最初から選べる社会になってほしい」という思いで声を上げ続け、その結果、県議会でも取り上げられて、埼玉県内で女子生徒のスラックス着用が認められる流れにつながりました。現在は、セラピスト芸人「千(せん)と桂(かつら)」としても活動し、介護やがん、セルフケアについて笑いを交えながら発信しています。2023年には、M-1グランプリで「ナイスアマチュア賞」を受賞しました。

伝えたいこと、これからのこと

私が伝えたいのは、普段の暮らしの幸せです。私は福祉を学ぶ中で、「まず自分を大切にできてこそ、周りの人を大切にできる」と教わりました。普段の暮らしの幸せは、まず自分を大切に扱うことからだと思います。だから、「今日も頑張ったね」と自分に声をかけてほしいんです。今後は、アピアランスケアに特化した取組をさらに広げていきたいと思っています。性的マイノリティの方も含め、「ここなら安心できる」と思える居場所をつくりたい。さらに、美容を通してセルフケアを伝える活動を学校や地域にも広げていきたいと考えています。私はこれからも、美容を通して“普段の暮らしの幸せ”を届けていきたいと思っています。

朝起きてまずすること
ラジオ体操からの15分散歩
好きな食べ物
あんみつ
尊敬する人
大事な方がたくさんいます

リラックス・タイム
寝る前のアロマ
5年後の私
家族円満で笑いが
絶えない家庭



受賞者一覧

※敬称略

※経歴等は原則として応募時のもの

第1回～第6回（平成17年度～平成22年度）

個人（19件）

- 天沼 裕子（指揮者、作曲家）
- 高澤 英子（藍染作家）
- 平敷 淳子（医師）
- 宇津木 妙子（スポーツ指導者）
- 長島 房江（人形師）
- 矢内 理絵子（女流棋士）
- 河端 静子（埼玉県障害者協議会会長）
- 塩浦 綾子（旅客自動車運送業経営）
- 中井 広恵（日本女子プロ将棋協会代表理事）
- 樋口 久子（日本女子プロゴルフ協会会長）
- 青野 輝子（元タクシー運転手）
- 木村 弘子（技術士）
- 山田 香織（盆栽家）
- 相原 香保留（少年警察ボランティア）
- 島田 由美子（NPO法人理事長）
- 白石 光江（養豚経営者）
- 堀内 壽子（警察犬訓練士）
- 高崎 絹子（大学教授）
- 野村 路子（作家）

団体（13件）

- SWS
- 特定非営利活動法人
ふじみの国際交流センター
- 有限会社メロード
- 特定非営利活動法人
新座子育てネットワーク
- 特定非営利活動法人
みんなのまち草の根ネットの会
- 上里町女性会議
- 鶴ヶ島市ひまわり会
- 特定非営利活動法人
わこう子育てネットワーク
- 埼玉中小企業家同友会
女性経営者クラブ・ファミ
- 結木の会(林業)
- 社団法人日本助産師会
埼玉県支部熊谷地区
- 特定非営利活動法人
ミランクラブジャパン
- 女性問題学習グループなの花会

事業所（12件）

- 大宮予備校
- 株式会社埼玉りそな銀行
- 医療法人社団誠弘会 池袋病院
- 日本ピストンリング株式会社
- 生活協同組合さいたまコープ
リリウ北本
- 石坂産業株式会社（産業廃棄物処理業）
- 医療法人慈正会丸山記念総合病院
- 医療法人土屋小児病院
- 医療法人顕正会 蓮田病院
- 津田工業株式会社（製造業(塗装)）
- 株式会社ヤオコー
- 株式会社リケン 熊谷事業所

第7回～第17回（平成23年度～令和2年度）

きらきら輝き部門（10件）

- 大谷 貴子
（元全国骨髄バンク推進連絡協議会会長）
- 田部井 淳子（登山家）
- 平間 保枝（社会起業家）
- 栗原 慶子（林業家）
- 尾池 富美子（NPO法人代表）
- 合同会社 ままのえん
- 岸田 則子（元日本ラグビー協会女子委員長）
- 海老原 夕美（弁護士）
- 吉野 美幸（外科医）
- 岡田 磨里（脚本家）

さいたま輝き荻野吟子賞（令和2年度・2件）

- 竹内 舞子
（国連安保理北朝鮮制裁委員会専門家パネル委員）
- 山口 絵里子
（㈱マザーハウス代表兼チーフデザイナー）

さわやかチャレンジ部門（18件）

- 長谷川 有貴
（大学教員(助教・博士(工学))）
- 碓井 美由紀（エンジニア）
- 金子 友紀（人形師）
- SHIORI（フードコーディネーター）
- 貫井 香織（農業者）
- 村上 暁子（職人）
- 来栖 智香子（足袋職人）
- 鈴木 美緒（介護・保育施設経営）
- 高橋 理子（アーティスト）
- 廣瀬 史子（エンジニア）
- 井原 愛子（起業家）
- 佐藤 摩弥（オートレーサー）
- 倉橋 香衣
（ウィルチェアーラグビー選手）
- 平山 真希（調教師）
- 石田 七瀬
（ものづくりコーディネート会社経営）
- 吉川 由美（ブランドアンバサダー）
- 下山 せいら
（宇都宮大学リサーチアドミニストレータ）
- 藤木 和子（弁護士）

いきいき職場部門（21件）

- 埼玉縣信用金庫
- 社会福祉法人杏樹会
- 株式会社武蔵野銀行
- 社会福祉法人熊谷福祉会
- 株式会社コマーム
- 株式会社クリタエィムデリカ
- 松坂屋建材株式会社
- 株式会社ビックルスコーポレーション
- 増木工業株式会社
- AGS株式会社
- リコーインダストリー株式会社
埼玉事業所
- 愛和グループ
- 株式会社システムインテグレータ
- 株式会社キャスティック
- ハスクバーナ・ゼノア株式会社
- 田部井建設株式会社
- 戸田中央医科グループ
- 株式会社ISPアカデミー
- ケイアイスター不動産株式会社

埼玉県荻野吟子賞（令和3年度～7年度）

個人・団体部門（16件）

- 大賞 ●佐藤 麻里子（（有）佐藤酒店社氏）
- サイタマ・レディース経営者クラブ（女性経営者異業種交流団体）
- 名知 仁子（医師）
- 新井 恵美（ちちぶエフエム㈱代表取締役）、山中 優子（同社取締役）
- 出浦 ゆみ（同社取締役）
- 佐藤 咲子（（一社）犯罪被害者等支援の会オリーブ代表理事）
- 桑井 亜乃（アルカス熊谷所屬ラグビーレフリー）
- 眞子 桂子（医療美容師・整容相談員・セラピスト芸人）、
山口 由美（山口農園代表）
- 奨励賞 ●山守 瑠奈（京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所助教）
- 村田 里依（㈱Tao Corporation代表取締役・狭山ケーブルテレビ㈱人事総務部長）
- 田島 友里子（さいたま有機都市計画代表）
- 藤代 瞳子（帯バグの小梅や代表）
- 松本 めぐみ（松本興産株式会社取締役）
- 増田 三枝子（認定NPO法人クラブ しっきーず 理事長）

いきいき職場部門（11件）

- 有限会社 福祉ネットワークさくら
- 株式会社 矢口造園
- 株式会社 井口一世 所沢事業所
- 医療法人 娯生会
- 新興プラント工業株式会社
- 竹並建設株式会社
- 深谷赤十字病院
- 株式会社 臼田 ファインモータースクール
- 株式会社 grain grain
- 株式会社 ベビーランド
- 八木建設株式会社